

# 学習指導上の技術・方法に関する一考察

安藤 秀朗

## 1 はじめに

2020年度（2019年度実施）公立学校教員採用選考試験の倍率が、多くの県市において前年度比で下がっている。関東だけを見ても横浜市小学校1.9倍、東京都小学校2.0倍、中学校では、特に技術の倍率が低く千葉県1.1倍、神奈川県1.8倍、そのほかの教科でも茨城県中学校理科1.8倍、同じく茨城県は美術、技術がともに1.6倍である。教育新聞は「全国66県市のうち、7割以上の県市で最終選考倍率（総受験者数÷最終合格者数）が下がった」また、「全国の合格倍率（総受験者数の合計÷最終合格者数の合計）は3.7倍で、2012年度実施試験以降で最も低く、3倍台となったのは同年以降で初めて（昨年度4.0倍）」と報じている。（教育新聞2019年11月4日）小学校倍率が2.0倍や中学校で、教科によるとはいえ2倍、あるいは2倍にも満たないという現状は、憂慮すべき状況である。

研鑽を積み経験豊富な教師は、生徒たちを引きつけ目を輝かせるような授業をする。1単位時間の授業をいかに内容の濃いものとし、生徒たちを成長させることができるかが教師に課せられている使命である。経験が浅く授業の指導技術が未熟な教師でも、志と環境があればいずれ必ず優れた教師に成長できる。本稿は筆者のこれまでの授業経験と多くの小中高等学校で研究授業を参観してきた経験から、よりよい授業をつくるための教師としての授業技術について、3つの視点から考察し学校現場での課題とあるべき姿を示す。

## 2 授業をつくる3つの視点

本稿は、質の高い授業を行うための技術・方法として次の3つの視点から考察をする。

1つ目は「指導内容に関する教科としての価値の理解」という視点、2つ目は「指導技術」

の視点、そして3つ目は「生徒の心理」的な視点である。

これらの視点に関する一定の技術が備わって初めて高質な授業を行うことが可能となる。ただし、これらの視点は必要条件である。熟練した教師が周到に準備して臨んだ授業であっても、授業は生き物で、生徒や学級全体の状況によっては必ずしも良い授業が行えるとは限らない。

### (1) 指導内容に関する教科としての価値の理解

研究授業では、指導内容や指導法を十分に検討した上での授業が多いが、日常の授業では、教科を問わずあまり検討されることなく教科書に書かれていることを指導しているだけの表面的な指導となっていることがある。

学習事項には指導のねらいがある。学習指導要領に示された「〇〇をまとめること」「〇〇を理解すること」「〇〇を表現すること」といった目標とあわせて、指導事項がもつ教科としての価値、本質的なねらいに思いを及ぼせることが必要である。例えば中学校数学科1年生の正の数、負の数の学習では、学習指導要領は次の通りである。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

(ア) 正の数と負の数の必要性和意味を理解すること。

(イ) 正の数と負の数の四則計算をすること。

(ウ) 具体的な場面で正の数と負の数を用いて表したり処理したりすること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) 算数で学習した数の四則計算と関連付けて、正の数と負の数の四則計算の方法を考察し表現すること。

(イ) 正の数と負の数を具体的な場面で活用すること。<sup>(1)</sup>

指導上しっかり押さえておきたいことは、学習指導要領にあるように、正の数、負の数を理解することや四則計算の方法を考え、できるようになることなどである。このことは重要なこととして習得し、身に付ける内容である。しかしこの学習においては、学習指導要領解説に、さらに次のようにも示されている。

例えば  $3-2$  という計算は「 $-$ 」を演算記号と考えると減法とみることができるが、 $(+3)+(-2)$  と表し、「 $-$ 」を符号とみると加法とみることができる。加法と減法を統一的にみることで、加法や減法の混じった式を正の項や負の項の和とし

て捉え、その計算ができるようになる。<sup>(2)</sup>(波線筆者)

すなわち、負の数の出現により、減法である「 $-2$ 」を負の数の加法「 $+(-2)$ 」と表記することで減法と加法を統一的に見ることができるということに気づき、数(すう)の世界が従来の正の数の世界から負の数の世界にまで拡張されたという意味に思いを馳せ、指導しなければならない。学習事項、教材の持つ教科としての意味や価値をしっかりと捉え、授業の準備をすることが必要である。経験の浅い教師の中には、教材の持つ価値を捉えられずに、表面的な指導となっているケースがある。学習指導要領解説書等により教材の価値を理解し授業を組み立てることが必要である。

教材研究を進めると、1単位の授業を準備するにも数倍の時間を要することもある。教具や資料を作成することもあり教師にとっては大変な労力である。しかし十分に研究され準備された授業こそが、生徒の成長を保証する真の授業となりうる。研究され準備された授業は生徒の心に届き、それが学習の習得と教師への信頼へとつながる。

## (2) 指導技術

授業における教師の指導技術や指導法について次の項目について述べる。

- ア 診断的評価
- イ 形成的評価
- ウ 話し方・表情
- エ 板書
- オ 机間指導
- カ 環境
- キ 座席
- ク ICTの活用
- ケ 指導形態

### ア 診断的評価

教師は指導にあたる学習集団の学力、とりわけこれから学習しようという内容に関する集団の学習状況や基礎知識等を事前に測定し、授業計画を立てなければならない。筆記による診断テストや口頭発問等により生徒の状況を見ることができるが、授業時間を確保す

ることを考えると、新たな章や単元に入ると診断テストを行うことは難しく、実際には教師の経験と勘によることがある。日常の授業の様子から集団の学習の習得状況を予測するケースである。この場合「成長期にある中学生は短期間で学力が変化することがある。」という点に注意が必要である。特に長期休み明けは、力をつけている生徒や、逆に家庭や生活に課題を抱え急激に学力を落とす生徒がいる。診断的評価を行えない場合には、教師は生徒の学力の変化にも気づき、褒めたり寄り添ったりなどし、変化に応じた授業を実施することが求められる。

また、教科担当として複数クラスを受け持っている場合には、どのクラスも同じ展開で授業を行うことがあるが、実際には集団の特徴には違いがある。診断的評価により集団の特徴を把握し、クラスにより指導方法を変えることも考えなければならない。

診断的評価では、学習状況に関する評価のほかに、指導する集団の教科に対する意識を知ることも必要である。教科担当者は自分の教科が好きか、授業が楽しいと思うかなど情意面の意識調査を年度はじめの授業で行うのがよい。同様の意識調査を年度の途中や年度末にも実施することで、教師の授業評価ともなる。また、生徒個々の性格や学級全体の特徴などについても評価が必要である。日常生活など様々な面から集団の実態を把握し特徴に合わせた指導を意識することが、生徒の学習意欲を高め、結果として授業効果を高めることにつながる。

## イ 形成的評価（形成的テスト）

形成的評価はテストを行う方法と授業中の生徒の反応をみる観察法がある。ここでは形成的テストについて述べ、観察法については、オの「机間指導」で触れることとする。

形成的テストを実施した際は、誤答は必ず訂正し理解の修正を行われなければならない。誤答を見過ごせば、生徒は誤りをいつまでもかつ確実に間違ったままで意識付けされてしまう。形成的テストを実施した際に一人ひとりの答案に教師が細かいチェックをし、説明を加える事は難しい。方法としてはテスト終了後に自己採点を行う。事前に印刷された正答を配ったり、口頭で生徒に答を言わせたりする方法がある。生徒はこの時点で自分の正誤を確認し、教師は全体に見受けられる間違いについては注意を促すことができる。橋本は「形成的テストにおいては事情が許す限りテストの終了後ただちに自己採点をさせるのは自己評価を行わせる方法として極めて効果的な方法」<sup>(3)</sup>と述べている。

また、形成的テストでは、得点をまとめて表記する必要はない。教師はその後の授業の

修正等に活用できればよい。生徒にはその時点での学習の習得状況を確認させ、その後の学習に生かすことに目を向けさせることが大切で、点数があることで本来の目的を見誤ることがある。

形成的評価としてのテストを総括評価の一部として扱おうとする教師を見かけるが、これは誤りで、総括的評価とは明確に区別しなければならない。

## ウ 話し方・表情

教師の話し方は大変重要である。学級の実態や生徒の発達段階に合わせた速さや声量が求められる。抑揚や間を上手に使うことで生徒を引き付けることもできる。同時に話すときの視線、身振り手振りなどにも気を配る必要がある。聞く者の立場になることが大切で、指導する学級の特徴により違いをだすこともある。

気を付けていても早口になってしまうことや教室全体を見渡して話をするべきところを決まった向きに偏る傾向、発問のような表現をしながら生徒の回答を待たずに自答し授業を進めていること、生徒の声をほとんど拾えていない授業などがある。授業中に教師が使う「えーと」を数えていた生徒がいた。本人が気づいていない口癖も生徒にとって授業の妨げとなっていることがある。ある中学校長から、教科担当教師の癖について、女子生徒とその保護者から厳しい苦情があったという相談を受けた。教師の人権には配慮が必要だが、不快を与えるような癖には十分に気を付けなければならない。

経験豊富な教師は、教室全体に目をやりながら話し、ちょっとした間をとることで生徒を引き付けたり考えさせたりすることができる。言葉に抑揚をつけることでキーワードを意識させることができる。あえて声の大きさを抑えることで、教室内に緊張感をもたせることができる。自分の授業を録画して癖や話し方の課題に気が付くことや同僚に授業を見てもらい気になる話し方などについて指摘してもらうことは授業力を高める上で大切である。このことは実は授業を受ける生徒のために必要である。学校には、こういった研修が校内で自然にできる環境整備が望まれる。

## エ 板書

小学校の授業では、板書が整理され計画的に使用されていることが多い。効果的な板書は、学習内容が視覚化されることで口頭による教師の説明や問いかけとあわせて、児童・生徒にとっては情報をよりスムーズに受け取ることができる。また、授業の経緯が残って

いることで、授業の内容が理解しやすくなり学習効果を高める。学齢が低い小学校ほど、板書は分かりやすく整理されていなければならないが、当然中学校、高等学校でも板書はわかりやすくあるべきである。しばしば、無計画で乱雑な板書を見かけることがある。板書は、黒板のメモではない。発した言葉やセンテンスを場所や大きさへの配慮なく書き綴るのでは、情報が錯綜し、受け手である生徒はかえって混乱することもある。

板書にあたっては、授業のねらいが明確になっていることや授業の展開が見えてくるよう計画的に配置する。分量については発達段階にも配慮する。また、字の大きさは教室の後方の席の生徒にも見える程度で基本的に同じ大きさとし、重要事項を大きくし補足を小さくするなどの工夫があつてよい。チョークの色も一般的な内容は白とし、重点を黄色とするなど用途を決めて使いわけるとよい。ただし、いたずらに多くの色を使用したり多用したりすることは避ける。かえって重要事項が曖昧で見にくい板書となり逆効果である。また、赤と緑の区別がつきにくいなどの生徒がいることにも配慮が必要である。

生徒が板書を写す時間も確保する必要がある。板書を写そうとするあまり教師の説明を聞くことができない状態や説明を聞いているうちに板書が消されてしまうといった状態を作らないようにする。

生徒は、基本的に板書をノートに写す。なぜ、板書をするのか。なぜノートに写すのか(ノートをとるのか)を最初の授業で、ノートのとり方とあわせて生徒に説明することは必要である。板書と授業中におけるノート作成は、小学校就学以来学校文化の中で当然の行為となっているため、生徒にとってもまた教師にとっても、その意味や役割をあまり考えずに行われていることがある。写すことのみが目的となり学びがない授業や、プリントで配布すべき長文を黙々と黒板一面に書いているような授業にならないよう配慮が必要である。

## オ 机間指導

机間指導には大きく二つの意味がある。一つは、先に示した形成的評価である。授業内容について生徒がどのように理解し、習得しているかを見極める一つの方法である。もう一つは、個々の生徒への寄り添いである。直接指導や学習意欲の喚起、学びに向かう姿勢を高めることができる。

形成的評価では、教師は発問や課題への取組に対して生徒がどのような反応をしているかを注視する。生徒の反応は直接的に言葉で返ってくることもあるが、多くの生徒は言葉



にすることなく、様々な表現でその時の状況を示している。顔の表情はもちろんノートの進み具合などを観察する必要がある。理解不足や見通しが立たず、つまづいている場合には頭に手をやったり首をかしげたり、眉間にしわを寄せたりしている場合がある。教師の話が理解できずにまばたきをしたり、まわりの様子を見たりすることもある。教師は生徒の状況を見取りながら、声かけはもちろん、進度を調整したり補充的学習を行ったり、場合によっては別なアプローチで学習を展開し直したりするなど必要に応じて授業を修正することになる。

机間指導の個々の生徒への寄り添いという視点は、一斉指導では対応できない生徒への直接指導のチャンスでもある。つまづいている生徒に対して、その生徒の課題を判断し直接的な最良の指導が可能となる。特に消極的な生徒には効果的である。

机間指導での寄り添いは、つまづきのある生徒への支援だけではない。早々に課題を解決している生徒には、さらに生徒の力に応じた課題を与えたり、良い意見を発表した生徒などに対しては、本人を直接褒めたりすることもできる。「さっきの意見はすばらしかった。」「よく考えているね。」といったほんのちょっとした言葉かけが、生徒の励みや学習意欲の喚起につながる。意図的な生徒への支援が可能となる。

生徒がそれぞれに思考を働かせている際に、特定の生徒と課題以外のことで話し込む教師を見かけることがある。この行為は当該生徒やまわりの生徒の思考の妨げになるだけでなく、公平性に欠け、他の生徒の意欲をそぎ信頼を失う。また、机間指導は腕組みをしながら監視をするような目で教室を移動するものではない。教師にはそのような意識がなくても、腕組みをしている教師は少なくない。そのように思われることがないように注意する。温かいまなざしで生徒の成長を求め、一人ひとりの様子を確認してまわるのが机間指導である。それは生徒に安心感を与える指導でもある。

## 力 環 境

### (ア) 設備・備品

最近では、小中学校の多くの教室にエアコンが設置されるようになってきた。(公立小中学校普通教室冷房設備設置率78.4%<sup>(4)</sup>) 生徒は夏場の暑い時期に以前のように暑さに耐えながら授業を受けるということは少なくなった。生徒の学習環境の整備は、学校と行政が一体となって推進すべき事業である。授業に必要なCDデッキ、TV (モニター)、書画カメラ、PC、電子黒板、プロジェクターなどは学校として計画的に設置していく必要

がある。電子黒板など高額な機器は学校として一定の判断がなければなかなか設置ができない。しかし、なければいつまでも使えない。設置して活用する立場にたつことが必要である。学校長の判断は大きい。

教科備品は、毎年の予算請求で必要な教材教具などの申請をするのが一般的である。筆者の経験で一切教具などを申請していない教科があった。独自教材で対応しているという理由からである。しかし、優れた教材や教具は多々ある。1年間の学習の見通しを持ち、生徒の学習に有効な教材は適切に準備すべきである。

### (イ) 教室環境

黒板が汚く掲示物が破れたりはがれたりしている教室やゴミが落ち机が乱れているような教室では、生徒は精神的に安定せず授業に集中することは難しい。枯れた花が片づけられることなく長い間放置されている教室を見たことがある。生徒は環境に染まる。割れ窓理論（ジョージ・ケリング 1982年）からは、割れた窓をそのまま放置すると、そういった行為が許容され、集団の意識が低下することが指摘されている。逆に、学級担任が学級の環境としてあるべき姿とルールを示し、常にそのことを大切を守り続ければ、生徒は自然と担任の姿勢を生活環境の基準とする。だれもが安心して生活できる教室環境は授業を行う上で重要である。安心して学習に取り組める環境を作ることは教師の務めである。

### キ 座 席

教室内の座席の位置により、生徒の授業に対する意識は少しずつ変わる。また、教師にとっても、教室全体に常に同等に注意を払い授業をすることはなかなか難しい。そのことを理解し意識して授業を行えると、生徒の気持ちに寄り添い、生徒をより主体的に授業に参加させることが可能となる。

教卓付近で授業を行っている場合、教師の視線は中心部に偏りがちになる。最前列の席は、視界には入っていても生徒と目線を合わせることが少なくなり、最前列左右の端は、視線を向けることが全くないこともある。また、最後尾の席は、教師との距離が遠く、生徒は自分に語り掛けられているという感情が乏しくなる。最後尾左右端の席は、視界には入っているが教師の注意があまり注がれない。壁側、窓側の列は、生徒としては自分のペースで授業に参加したり気を緩めたりしやすい席である。前から2列目3列目の中心部は、学習には最も良い席と言われるが、逆に常に緊張を強いられる席でもある。教師はこう



いった座席による生徒の気持ちの違いを理解し、意識をして生徒に刺激を与えたり気持ちを和らげたりすることや、また公平に一人ひとりの様子を観察することが必要である。

## ク ICTの活用

今回改訂の中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編（平成29年7月告示）では、

情報手段を活用した学習活動を充実するためには、国において示す整備指針等を踏まえつつ、校内のICT環境の整備に努め、生徒も教師もいつでも使えるようにしておくことが重要である。すなわち、学習者用コンピュータのみならず、例えば大型提示装置を各普通教室と特別教室に常設する、安定的に稼働するネットワーク環境を確保するなど、学校と設置者とが連携して、情報機器を適切に活用した学習活動の充実に向けた整備を進めるとともに、教室内での配置等も工夫して、生徒や教師が情報機器の操作に手間取ったり時間がかかったりすることなく活用できるよう工夫することにより、日常的に活用できるようにする必要がある。<sup>(5)</sup>

としている。ICTを上手に活用することにより、これまでの板書や教具を使つての授業とあわせてさらに効果的な指導が期待できる。しかしICTの活用が目的ではないということには注意が必要である。あくまでもツールとしての機器である。

ICTの活用は、その整備状況は自治体や学校間による差がある。また、学校内では情報機器の操作に長けている一部の教師が活用しているケースが多い。校内では、機器の整備を計画的に進め、あわせて機器の活用についての研修を推進することが必要である。

デジタル教科書は学習効果が期待でき、今後多くの学校での活用が進むものと思われる。デジタル教科書はモニター（TV画面やプロジェクター、電子黒板）に拡大表示することで、視覚的に生徒全員が一斉に共有することができる。また、教材としての図や資料が豊富で、社会科や理科では資料の解説や写真を拡大し、一部を特化して映し出したり、動画教材を提示したりすることができる。数学では、図形を動的に見ることを可能にしている。教科書の問題文を表示し、内容を全員で共有し理解することにも効果的である。英語科や国語科では音読も可能である。映像を消し、音声だけでイメージを持つこともできる。

デジタル教科書や電子黒板は機能が多く、使いこなすには一定のスキルを要するため、授業での使用に消極的になる傾向があるが、まずは拡大し生徒に示す程度でも十分効果が

ある。無理に使用することはなく、効果が期待できる部分での使用を試み、使いながらその幅を広げていけばよい。

公立学校では、高価な機器は導入が進まないことがあるが、教育委員会の施策により推進されている自治体が増えている。学校は少しずつ環境を整備し、可能なところから一歩を踏み出すことが必要である。

## ケ 指導形態

授業の形態を工夫することで、授業の質を高めることが可能である。一斉授業を行う中で、グループ毎の話し合いを行ったり、隣同士で考えを深めあったりする手法や、学級全体を複数の集団に分け複数教師が授業を行う少人数指導、一クラスを複数の教師で授業を行うティーム・ティーチング(TT)などの方法がある。平成19年度の全国学力・学習状況調査及びその分析では、習熟度別少人数指導の効果について次のように述べている

多くの時間で習熟の遅いグループに対する少人数指導や習熟の早いグループに対する発展的指導を行った学校の方が、少人数指導や発展的指導を行っていない学校より、学校の平均正答数はやや高い傾向が見られる。<sup>(6)</sup>

中学校では平成元年度の学習指導要領改訂から「学習内容の習熟の程度に応じた指導」として教員の加配対象となり、習熟度別少人数指導が行われるようになった。その効果により上に示したように一定の成果は表れているといえる。ただし、上記の分析でも言われているが、習熟度別少人数の指導にあたっては、様々な要因が関係することからその効果は、必ずしも習熟度に集団を分けるという形式的なものではないものと思われる。すなわち、その形態でどのような授業を行っているかが大変重要である。ここでは、授業形態の方法論を述べるのではなく、実践の経験からよりよい授業を行うための考え方について述べるものとする。

アクティブ・ラーニングによる授業の推進が言われるようになり、グループ活動を行う傾向が強くなっている。しかし生徒がグループになり話し合いは始まるが内容が一向に深まらないことや一部の生徒の声で簡単に結論づけてしまうこと、あるいは、議論の内容が授業から離れてしまうこともある。「活動があつて学びがない」と言われる状態である。グループでも隣同士であっても、話し合い活動をさせる指導においては、話し合いの意図を明確に示さなければならない。曖昧な投げかけでは生徒が何を話し、どこを目指せばよいのかを理解せぬまま話をしていることがある。複数での話し合いでは、最初に進行役や

発表役などの役割を決めることも効果がある。また、その際、役割はその都度変えて行うように配慮する。教師は、それぞれのグループの話し合いの様子を観察し、場合によっては話に入り話の流れを指導することもある。自由な話し合いをさせながらも、民主的で議論の流れをコントロールすることで、生徒に話し合いの仕方を指導しなければならない。

TTでは、教師の役割が曖昧なため、あまり効果的でない授業を見ることがある。2人の教師がひとクラスで指導を行う場合、教師がT1（中心として授業を進行する）とT2（生徒の様子を見ながら個別指導を行う）という立場で授業を行うケースが多い。この場合、特にT2の役割が明確でないことがある。二人で指導を行う場合、T2は授業の内容に呼応して、教室内を巡回しながら生徒を観察し、必要に応じて生徒を直接指導する。授業の内容によっては、教室内を動き回ることがかえって生徒の集中を妨げることもあるので注意は必要である。また、問題演習や考える時間、話し合いや英語の会話練習などの活動的な時間は、教室内全体を見渡しながら生徒を直接的に指導する。その際、教室全体の様子も観察し、バランスをとりながら指導を行うように配慮するのがよい。こういった具体的な指導とともに大切なことは、指導にあたる2人（複数）の教師間のコミュニケーションである。授業前に授業の内容や進め方等を確認したり、お互いに指導について意見を述べたりすることで、より効果的な指導方法を準備することが重要である。十分には準備ができなかったとしても、授業中でも微調整や意見交換は可能である。そのためには、日常からお互いが率直に意見交換できる関係であることも大切である。このことは、生徒は授業中の教師たちの様子から敏感に感じ取っていることが多い。教師間の関係が良好であれば、それだけで生徒は安心し、より効果的なTTの授業となる。逆なケースでは、生徒は教師に気を遣い不要な緊張感を生み出してしまう。TTであることがマイナスとなることがある。

少人数指導では、指導する生徒の人数が少ないというメリットを最大限に生かし、生徒一人ひとりの発言機会を増やすことや、生徒のつまづきを見逃さず、個に応じた指導をきめ細かく行うといった取組が求められる。生徒にとっては、40人近くの授業と比べて、教師がより近い存在であり、質問や意見をだしやすい環境となる。一般の授業以上に生徒に寄り添った授業が可能となる。

少人数指導での集団の分け方は教科の特性による。数学では習熟度別指導が効果的で、人数を均等に分ける必要はない。生徒の習熟の様子によって、グループの人数に差があってもよい。それぞれの習得状況に応じて授業の進め方を工夫できる。ただし、分ける際に

は生徒の自尊感情や学習意欲に十分配慮して、本人と保護者の希望により分けるのがよい。また、その集団は1年間固定とするのではなく、学期ごとや領域（または単元）等の終了時点で、変更できるように柔軟にすることも必要である。英語の場合は、公立学校では機械的に人数を均等に分ける方がよい。会話などのアクティブな活動ではある程度的人数がいて、生徒同士が相手を交換しながら数多く会話をすることが可能となる。習熟に差があってもそういった活動を通して全体の学力を高めることが期待できる。

授業力がある教師は、一クラスが20人であっても40人であっても生徒を引きつけ、学力を向上させる。TTや少人数指導は、確かに効果は期待できるが、大切なことはどのような形態であっても、そのメリットを最大限に引き出すような授業を工夫することである。

### (3) 生徒の心理

#### ア 安心できる教室

授業を行う大前提として、教師は授業におけるルールを確立し、学習者に対してその必要性を理解させ遵守させなければならない。一人ひとりの発言が尊重され、間違いが許される温かさが教室を包み、必要な場面では毅然とした姿勢で教師が授業をコントロールする。こうした教師の指導のもとで生徒は安心して授業に参加できる。

健全な学習環境は、生徒の心理的安定を保証し学力の向上はもちろん、生徒の成長にもプラスの影響を与える。健全な環境で一年間を過ごした生徒と、そうでない生徒では学習面、精神面での成長に差が生じる。

かつて勤務した中学校で、3年次スタートの4月には学習に取り組む様子にクラス差がなかった学年で、6月ごろから一クラスに変化が表れ始めた。クラス全体が落ち着かず授業に集中できない雰囲気が広がり、一部生徒は明らかに授業を受ける姿勢を欠いていた。こういう状況の中で、4月当初には学級のリーダーとして期待されていた生徒に学級の雰囲気を崩す様子が見られ、学習に意欲的な一人の生徒は自己中心的になっていった。学級全体としての学習の達成度は低下した。

温かい学級で、お互いを認め尊重できる空気があるクラスは、授業が活発で反応が良い。意見が出やすく失敗や間違いを恐れて委縮するようなことはない。学級の安定を作り出すのは、学級担任の学級経営に負うところが大きいですが、中学校では教科担当者の指導として、安心して意見が言えることや間違えられることを保証する空気をつくることが求められ

る。時に、授業としてのルールが保たれず、不規則発言がとがめられることなく起こる授業を目にすることがある。原因として、一部の生徒が課題を抱え、正常な授業を行うことが難しいケースと教科担当者の指導力の課題によることが考えられる。前者の場合は、当該生徒のためにも、他機関を含め迅速・丁寧に対応することが必要である。丁寧な対応により授業にも変化をもたらすことになる。後者の場合は、当該教師の指導力の向上が必要で、学年主任や管理職による指導や、メンター研修などにより教科指導とともに教師としての研修が必須である。教育委員会による研修や指導力を補う研修に参加させることも検討する。

学級担任をはじめ、係わる教師集団が協力し、生徒が安心して学べる環境を整えることは教師の責任である。

## イ 評価活動

評価は学習内容に対して適切に行われなければならない。学習指導要領に基づき、評価規準をもって、根拠とともに適正に評価がなされることが必要である。ここでは評価の方法について触れるのではなく、評価が与える心理的な側面について触れる。

学校現場の実情として、特に中学校では、生徒と保護者は評価に対する関心が非常に高い。このことを教師は十分に認識しておく必要がある。評価に対する関心が高いことは好ましいことであるが、残念ながら自分（子供）の「学習の習得状況を知る」という本来の意義以上に「高校進学に資料に影響する」というのが本音である。このことの是非は別にして、評価については生徒・保護者からの関心が高いだけに、きちんとした説明が、事前にも評価を与える際にもなされなければならない。具体的には、担当する教科の評価方法・評価規準等について、何を、いつ、どのような方法で評価し、どのように総括をするのかについて具体性をもって示すことが大切である。年度の最初の授業や教育課程説明会などの場で説明をする必要がある。説明は生徒・保護者の立場にたち、理解できる言葉で丁寧に行うことが大切で、ことばや説明が難しく結局はよくわからないということがないようにする。説明会のあとや懇談会の席で保護者からの声を集めることも学校の姿勢として必要である。疑問や不信感を持たれることがないように十分に配慮するべきである。

評価方法や手順について、何等かの理由から当初の評価計画でない形で行うような場合には、必ずすべての対象生徒にそのことを説明した上で実施をする。また、同一教科で複数の教科担当者がある場合、学年内や学校内で評価方法については共有し、少なくとも学年

内では同一方法で評価を行うことが基本である。

こういった評価に対しての学校の姿勢や生徒・保護者の立場にたった説明は、生徒・保護者に信頼感と安心感を与えることになる。逆に、計画性がない評価活動や説明とは違う評価を行えば、生徒は不安になり、教師に対する不信感や教科嫌いを生むことにもなる。

## ウ ほめること

一般に、ほめられることや認められることで生徒は自尊感情を高め、活動に対する意欲が沸き効果を上げると言われる。

筆者が以前行った「教師が生徒をほめることが学習意欲や学力の向上に効果があるか」の調査<sup>(7)</sup>では、ほめられることが「やる気の喚起」につながる傾向を示した。ただし、結果からは「得意な活動では、ほめられるよりも叱られたり指摘をされたりした方がやる気になる」という生徒が40%となり、一概にほめればよいというだけではないということもうかがえた。苦手な活動については77%の生徒が「ほめられた方がやる気になる」と感じている。これらのことから、生徒が苦手と感じている活動ではほめた方が効果的であることが多く、教師の厳しい指摘は、客観的で適切な指導であっても教師の思いとは逆に生徒のやる気を失わせたり、教科に対してマイナスの感情を抱かせたりする可能性がある。また、この傾向は内交的な生徒よりも外交的な生徒の方により強く表れていた。「ほめる」指導と「叱り指摘する」指導では、生徒の受け止め方は、得意な活動かそうでない活動かという活動の内容や生徒の性格により差が生じることがうかがえる結果となった。指導者は指導対象である生徒の性格や特性を把握していることも必要である。

ただし、ほめる・叱るなどの賞罰について波多野は「自分の頭で考え、自分なりの基準で行動できる人間に育てるには、子どもが賞や罰でコントロールされっぱなしという状態を改めなければならない」<sup>(8)</sup>とし、また村松は賞罰の前提として「あらゆる機会における本当の意味での人間関係—信頼関係—が作られていなければならない」<sup>(9)</sup>としている。ほめることや叱る事は一定の効力を持ちながらも、その指導には教師と生徒との信頼関係の構築が前提である。

## エ 生徒にやる気を起こさせる要因

速水<sup>(10)</sup>は子どもにやる気を起こさせる要因のひとつに教師に関する要因をあげている。教え方はもちろん子どもの性格や心理をよく把握しているか、さらに教師自身の性格や態



度的要因もあるとしている。これについて三宅<sup>(11)</sup>の研究からは学習への動機付けに関する影響として授業中における学習面の援助活動以外にも「授業中おもしろい話をしてくれて、教室を楽しい雰囲気にしてくれた時」「休み時間に一緒になってみんなと遊んでくれた時」などを挙げ、教師との心の触れ合いにより子どもの動機付けは高まるとしている。このことから生徒へのやる気を喚起させる支援活動は一単位時間の中だけで行われるものではなく日常的な関わりの中でもなされるものでもあることもわかる。経験からこのことは、低学年で、また、生徒との関係が初期の段階に特に当てはまる傾向がある。

### 3 まとめ

子どもたちが、これからの社会で力強く生きていくために、学校教育が負う責任は大きい。その基本である授業は質の高いものでなければならない。子どもたちが目を輝かせて学び成長できるために、教師は常に自己研鑽に努め、より質の高い授業をしなければならない。

本稿では、質の高い授業を行うための授業技術や手法、考え方について、筆者の経験を通して3つの視点から述べてきた。一部は筆者が以前（1995年）横浜国立大学教育学部に研究生として在学していた際に研究した内容にもふれ、加筆修正し示した。

本稿で示したそれぞれの項目については、さらにその内容を吟味していきたい。特にこれからますます求められるICTの活用については、文部科学省が「新時代の学びを支える先端技術のフル活用に向けて～柴山・学びの革新プラン～」(2018年11月22日)を公表し、2019年6月には「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(最終まとめ)」(2019年6月25日)を示している。また、経済産業省も同時期に『『未来の教室』ビジョン』(経済産業省「未来の教室」とEdTech研究会第2次提言)を示している。こういった国の動向にも注視し、今後の授業の在り方を深めていく。

＜引用文献・注・参考文献＞

- (1) 文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）平成29年3月」（2017），p.66
- (2) 文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 数学編 平成29年7月」（2017），pp.66-67
- (3) 橋本重治 新・教育評価総説 下巻 金子書房 1976年 p.135
- (4) 文部科学省「公立学校施設の空調（冷房）設備の設置状況について」（令和元年9月19日）
- (5) 文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編 平成29年7月」（2017），p.86
- (6) 文部科学省「平成19年度全国学力・学習状況調査追加分析結果 II. 習熟度別・少人数指導について」（平成20年8月）  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/08020513/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/08020513/001.htm)
- (7) 1995年9月 横浜市立O中学校1～3年生313人対象に実施した調査
- (8) 長島貞夫（編）ほめ方・叱り方の心理学 金子書房 1976年 p.18
- (9) 同 pp.141-142
- (10) 北尾倫彦・速水敏彦 わかる授業の心理学，有斐閣 1986年 p.40
- (11) 三宅正太郎 学習意欲を高める教授行動の分析に関する研究（1）一因子分析による教授行動と学習者特性の分類—大阪府科学教育センター研究紀要4号 1985年 p.17